

12) 3年後に確認された中大脳動脈末梢動脈瘤の1手術例

早野 信也・鈴木 健司 (水戸済生会病院)
新保 義勝・森 修一 (脳神経外科)

第19回リバーカンファレンス総会

日 時 平成7年3月18日(土)
午前9時～
会 場 ミナミプラザホテル
3F ロイヤルホール

I. 一般演題

1) 肝胆膵領域における DIC

—当科における最近4年間の DIC 症例
に関する検討—

畑田 勝治・尾崎 和幸
本間 照・高橋 達
朝倉 均 (新潟大学第三内科)

最近4年間に当科に入院した1,367例のうち DIC を合併した症例のは52例(3.8%)であった。

DIC 症例では感染を契機として発症する例が多く、そのコントロールが治療に重要であった。DIC の予後は死亡率が88%と悪く、治療に難渋する例が多かった。

治療は、蛋白分解酵素阻害薬ならびに、アンチトロンビン-III, FFP の補充が主であり、ヘパリン単独使用例はなかった。

key words ; DIC, 感染, 蛋白分解酵素阻害薬.

2) 肝疾患におけるアジアロシンチグラフィーの臨床評価

—肝予備能との比較検討—

高橋 澄雄・相川 啓子 (日本歯科大学)
豊島 宗厚・曾我 憲二 (新潟歯学部)
柴崎 浩一 (附属病院内科)

【目的】アジアロシンチ注を用い、同検査の有用性、特に肝予備能の評価について検討した。【方法】心臓及び肝臓に関心領域 (ROI) を設定し、同部の時間—放射能曲線を作成し血中クリアランスの指標として HH 15, 肝集積の指標として LHL 15 を算出した。慢性肝炎、肝硬変、肝細胞癌、他の肝腫瘍、脂肪肝例にて検討した。

【結果】HH 15, LHL 15 は肝疾患の重症度及び T. Bil,

ALB, ChE, PT, HPT, ICG 15分値と有意な相関を示した。【結論】アジアロシンチ注により肝疾患の進行度、肝予備能の評価が可能であった。慢性肝疾患の病態の把握のため有用であったが、肝細胞癌と他の肝腫瘍での集積パターンの差は認められなかった。

3) 慢性肝疾患における低酸素血症の検討

和栗 暢生・橋立 英樹
田中 勝・中村 厚夫
関 慶一・鈴木 和夫
本山 展隆・植木 淳一 (新潟県立中央病院)
阿部 惇 (内科)
吉村 宣彦・塚田 博 (同 放射線科)
高木健太郎 (同 外科)
畠山 重秋 (畠山 医院)

我々は慢性肝疾患に著明な低酸素血症を合併し、Hepatopulmonary syndrome と考えられた2例を経験したので報告した。2例は肺活量や1秒率に異常なく、画像的にも肺野に著変をみなかったが、肺拡散能の減少と、末梢気道閉塞の所見を認め、肺血流シンチでは肺内動静脈シャントが示唆された。2例はともに血管拡張に関わるとされるグルカゴンが高値を示したが、成因となりうるかは不明であった。その他の28例の慢性肝疾患症例を加え、食道静脈瘤や Child 分類と動脈血酸素分圧の相関を検討したが有意差は認められなかった。

4) 肝性脳症に対する Helicobacter Pylori 除菌の有用性の検討

橋立 英樹・和栗 暢生
田中 勝・中村 厚夫
関 慶一・鈴木 和夫
本山 展隆・植木 淳一 (新潟県立中央病院)
阿部 惇 (内科)
高木健太郎 (同 外科)
山田美恵子・歌代祐巳子
山田 恵 (同 検査科)
畠山 重秋 (畠山 医院)

症例1は64才の男性。アルコール性肝硬変による肝性脳症 coma grade III 度にて当科入院した。入院時検査成績で血中アンモニアは 237 $\mu\text{g}/\text{d}$ であった。通常の肝性脳症の治療に抵抗したため胃内の Helicobacter Pylori (HP) が血中アンモニア値上昇に関与している可能性を考え、上部消化管内視鏡検査を行い胃角・体部に HP を認めた。HP に対し2週間の除菌 (AMPC 1.5g, メトロニダゾール 500mg, ランソプラゾール 30mg, プラウノトール 480mg) のみにてアンモニアは著明に低下